

令和元年6月10日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13484

研究課題名(和文)自閉症スペクトラム障害の限定化に関する実証研究

研究課題名(英文)Research on localizing autism spectrum disorder

研究代表者

河合 俊雄(Kawai, Toshio)

京都大学・こころの未来研究センター・教授

研究者番号：30234008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：近年の発達障害と診断される人の増加に伴い、過剰診断や誤った対応が生じるリスクを鑑みて、本研究は“自閉症スペクトラム障害の限局化”を試みた。研究成果として、発達検査の結果を含めたプレイセラピーの累積的事例研究からは、診断を受けながらも発達障害とは見立てられない子どもの状態像と共に、その心理的特徴や課題が明らかになった。更に本研究は、そうした子どもの状態像に応じて、プレイセラピーの効果とその展開のポイントを実証的に示した。こうした成果を基に、論文や書籍の発表と複数の講演を行い、発達の非定型化や時代背景の影響といった視点を含めて、誤って発達障害と診断される人々のスクリーニングや支援の方法を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトは、神経生理学的視点と心理学的視点を協働させ、これまでも発達障害児へのプレイセラピーの方法論とその効果を、実証的に明らかにしてきた。本研究成果は、発達障害に類似の問題を示す非発達障害児についても、その心理的特徴や心理的課題と、プレイセラピーによる変化の機序、援助可能性を明らかにし、加えて発達障害の診断・見立ての際に誤りやすいポイントをその背景要因と共に具体的に把握することにも繋がった。臨床実践と定量的知見の双方を基に提示された本研究成果は、過剰診断による誤った対応を防ぎ、かつ非発達障害児への援助体制の確立にも貢献するものであり、これは本研究の学術的・社会的意義と考えられる。

研究成果の概要(英文)：Increasing the number of people given diagnosis as autism spectrum disorder (ASD) today causes the risks of giving excess diagnosis or wrong supports to people who could not be evaluated as ASD, so that this research tried to “localize autism spectrum disorder”. By the cumulative case study research of the play therapy with the result of the developmental test this research found out the clinical picture of children who could not be evaluated as ASD despite of diagnosis as ASD; besides their psychological characteristics or themes. In addition, it also indicated empirically the effect of the play therapy and the point that develops the therapy depending on the clinical picture of those children. Based on these results this research group published articles or a book and gave multiple lectures to present the way of screening for people who could not be evaluated as ASD, considering a tendency not to follow the typical course of development or contemporary social background's effects.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 プレイセラピー 過剰診断 新版K式発達検査2001 親面接

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、発達障害は、脳の中枢神経系の異常による、器質的・生得的な認知発達の障害と考えられ、援助には訓練・療育的対応や、薬物療法からのアプローチが中心になっている。こうした援助に対し、プレイセラピーによるアプローチは、発達を促進させることに目標をしばるわけではなく、子どもの自発的で自由な遊びを中心に、セラピストとの関わりを通じて、内面の形成や自己の確立といった、子どもの心理的な成長を目指すものである。

これまで、発達障害には、心理療法は有効でないと考えられてきたが、個別の事例検討からは、発達障害への心理療法・プレイセラピーなどの意義も多く報告されてきた。そのため、研究代表者らは、発達障害への心理療法の有効性を、実証的に検討すべく、「発達障害への心理療法的アプローチ」プロジェクトを立ち上げ、平成20年～平成22年の3年間は、主に事例検討会を重ねてきた。その臨床実践に基づき、発達障害の中心となる特徴として「主体性の欠如」を捉え、それに対して「主体性の発生」に立ち会う心理療法が有効であることを確かめてきた。

(2) 上述の活動と得られた知見を基に、平成23年以降は、発達障害の子どもを対象にプレイセラピーを6ヶ月実施し、発達指数の変化から心理療法の効果を実証的に検討するとともに、発達障害と診断される子どもの家族関係にも着目し、親面接の意義等の検討を行ってきた。

その過程で、近年、発達障害の診断や疑いを受けながらも、発達障害の診断の範疇とは見立てられない事例が増加していると考えられた。こうした発達障害と見立てられない事例について予備的検討を行ったところ、「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」の4分類が想定され、子どもの側にも自信のなさや幼さがみられる場合が多いのと同時に、保護者や周囲の捉え方や関わりが子どもを「発達障害」の理解に収めてしまう側面も示唆された。

昨今の臨床現場では、自閉症スペクトラム障害(ASD)と診断される人が増加しているが、このような診断の範疇に含まれない、問題が比較的軽度とみられる子どもの事例を、発達障害の子どもの事例と比較検討することは、現在生じている発達障害増加の原因を明らかにすることに加え、発達障害に類似の問題を示す人々への理解の枠組みと援助体制の確立に貢献できるのではないかと本研究の着想に至った。

### 2. 研究の目的

(1) 近年、自閉症スペクトラム障害(ASD)と診断される人は増加しているが、過剰診断され、それにより誤った対応がされている可能性がある。本研究は、心理検査とプレイセラピーによって、ASDと診断される人にそうとは見立てられない人が含まれている可能性を検証し、誤ってASDと診断されている事例にどのようなタイプのものがあるかを明らかにすることを目的とする。さらに6ヶ月と12ヶ月のプレイセラピーの前後の発達検査の比較により、ASDと見立てられる群と見立てられない群の心理的特徴・援助可能性の違い・共通性を探る。

(2) ASDと診断を受けながらもASDとは見立てられない子どもの特徴とプレイセラピーの展開について得た知見をもとに、ASDと診断される人の増加の原因、ASDという診断を受けていてもASDと考えられない人をスクリーニングする方法を提唱し、そのような人々への従来とは異なる援助可能性を模索する。具体的には、ASDの診断・見立ての際に誤りやすいポイントをその背景要因と共に把握し、プレイセラピーによる対象児の変化の検討から、ASDに類似の問題を示す非ASD児の理解の枠組みと支援の方法を提案する。

### 3. 研究の方法

(1) 【誤診断要因の分析と分類】のため、京都大学こころの未来研究センターのホームページ上にて、別機関でASDの診断を受けた児童から研究協力者を募集した。協力児童がASDと見立てられるかについては、医学・心理学的に改めて査定を行った。査定では、プレイセラピー開始前に、協力児に新版K式発達検査2001を実施し、心理発達の側面から、認知・言語面等の発達段階を評定した。また、保護者評価として、保護者からの親面接式自閉スペクトラム症評定尺度(PARS-TR)に基づく聴取と、半構造化面接による対象児の生育歴・日常生活の様子を把握した。

各事例のインタビュー面接終了後、スタッフ全員でカンファレンスを開き、各担当者が発達検査、保護者評価、初回プレイセラピー時の様子を報告書にまとめたものをスタッフが共有し、見立てや今後の方針について検討した。ASDと見立てられなかった群については、誤った診断・判定に至った背景を分析し、予備研究で得られた「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」のどれにあたるかを分類した。

その後、ASDと見立てられた群、見立てられなかった群について、当センターのプレイルームにて、週1回50分のプレイセラピーを6ヶ月、延長が同意されたものについては引き続き実施した。プレイセラピーは、心理療法の専門家チームが担当し、事例検討会・スーパーヴィジョンにより随時フォローした。

プレイセラピー開始後6ヶ月・12ヶ月の時点でケースカンファレンスを行い、プレイセラピーの展開あるいは停滞のポイントを検討し、以降のセラピーの指針とした。特に、予備研究で得られた「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」の4分類を基に、発

達障害の診断に至った背景について、プレイセラピー実施後の変化可能性等を比較検討した。

(2) 【プレイセラピーの方法論の違いの分析と臨床的支援方法の提案】として、個別事例の検討だけではなく、研究協力を受けた事例全体をまとめた成果の検討を進めた。各事例については、医学・心理療法の専門家チームでケースカンファレンスを実施した際、当該事例の診断・見立てについて再検討し、かつプレイセラピーのプロセスについても質的に検討しており、それらの情報に基づいて累積事例研究を行った。特に、ASD 児群と非 ASD 児群について、プレイセラピー前後の査定結果(医学診断、心理発達検査、保護者評価)とプレイセラピーのプロセスの事例研究から、セラピーの効果の有無とその展開のポイントについて、量的・質的な検討を試みた。

具体的には、プレイセラピーの前後で子どもにどのような変化が生じているか、発達障害の子どもと非発達障害の子どもとは、プレイセラピーのポイントはどのように異なるか、プレイセラピーによって変化がみられた場合には何が展開のポイントとなっているか、という3つの観点から、非発達障害児へのプレイセラピーの効果と治療機序を検証した。また、予備研究で得られた「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」の4分類を基に、どのような状態像の子どもに対して、どのような関わりかけが有効に機能するのかについても検討した。

#### 4. 研究成果

(1) ASD と診断を受けながらも ASD とは見立てられない子どもの特徴を、実際の事例に基づき検討した論文を発表した。ASD と見立てられなかった事例が ASD と誤診されるに至った要因を抽出し、そのポイントを元に「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」の4群に分類し、各群の特徴を明らかにした。(右図)さらに、各群に共通した ASD とは異なる特徴として、自他が当初より分化し、内的な他者イメージが存在していることを指摘した。

群名	説明
自己主導群	一方的な関わり方や独特な自己表現によって、対人関係上のトラブルが起きやすい
摩擦回避群	ASDの診断や周囲からそう理解されることにより、他者や環境との摩擦が回避されている
他者意識群	他者からの評価や期待に過剰反応した結果、不適応が生じている
心理反応群	心理的要因によって症状や問題が生じている

(2) ASD と診断を受けながらも ASD とは見立てられなかった3事例を取り上げ、そうした事例のプレイセラピーの展開について検討を行った論文を発表した。各事例はみな自他の区別は成立しつつも、何らかの発達の偏りが見受けられたが、セラピーのなかでセラピストというリアリティを伴う他者を体験することで、不自然につくられていた一見自閉的なあり方が崩れて内的過程が新たに動き出したり、内面を抱える基盤が形成されたりすることが示唆された。

(3) ASD と診断を受けながらも ASD とは見立てられない事例には、保護者の捉え方や関わりが子どもを「発達障害」の理解に収めてしまう側面も示唆されてきた。そのため、ASD と診断された子どもの保護者面接についても、その重要性を検討した論文を発表した。保護者自身が ASD 特性を有している事例においては、保護者との密着した関係や保護者の主観的な理解が子どもの問題に影響を与えている場合があることが示唆された。このような保護者の面接においては、保護者の影響を考慮しつつ子どもを理解すること、保護者の混乱や困惑を受け止めることが重要なことを提言した。

(4) 本研究プロジェクトでは、発達障害への心理療法の実証研究において、発達障害の中心となる特徴を「主体性の欠如」として捉え、従来のクライアントの主体性を重視する心理療法と異なり、発達障害への心理療法では、セラピストが積極的に主体を示すことが必要になる事例を多く確かめてきた。そこで、ASD と診断された子どもとのプレイセラピーでのセラピスト側の働きかけがセラピーに与える影響について検討し、学会発表を行った。本研究では、ASD 児と、ASD とは見立てられなかった非 ASD 児の「自己主導群」、「摩擦回避群」、「他者意識群」、「心理反応群」それぞれにおいて、セラピストの積極的働きかけが生じる場面やそれに対する子どもの反応が異なることが明らかになり、各群に対して積極的働きかけがもつ意義を示した。

(5) 研究協力を受けた ASD と診断された子どもの全事例について、プレイセラピー前後の新版 K 式発達検査 2001 の指数変化を、個々の事例のプロセスと合わせて検討し、学会発表を行った。セラピーの展開と発達検査の結果の比較からは、セラピーのテーマや遊びと、発達検査の通過項目に対応があることが明らかになった。また、ASD と診断された子どものセラピーのプロセスでは、発達課題へ取り組み、発達領域でできることを増やすだけでなく、これまでのその子どものあり方をいったん崩し、その上で新しいあり方を作り直すような動きも生じていた(右図)。そうした動き

- ▶ 年齢に不釣り合いな  
知的・概念的理解の弱まり
  - ▶ 過剰な他者意識・抑制がとれる
  - ▶ 無理・背伸びがなくなる
  - ▶ 今までできていたことも、  
しなく/できなくなる  
(崩れが日常に波及することも)
- ⇒ **いったん崩し、作り直す動き**

が生じる際、以前の学会発表でもテーマとして扱った、一見するとネガティブな事象、混沌とした感覚遊び、セラピー内でのハプニングが重要なポイントとなることが示された。

(6) 本研究では、対照群である ASD 児のプレイセラピーについても、非 ASD 児へのプレイセラピーと通じるポイントを検討するために事例研究を行った。論文では、ASD 男児との約 3 年間のプレイセラピーの過程を、半年ごとに実施された新版 K 式発達検査 2001 の結果とともに報告し、プレイセラピーと K 式発達検査の関連を検討することで、ASD に対するプレイセラピーの有効性と意義を実証的に示した。また、こうした ASD の心理療法のポイントを取り上げながら、本研究での ASD 児と非 ASD 児のプレイセラピーの比較検討に基づき、ASD 的臨床像へのセラピーでも同様に、子どもの主体性の促進が重要となり得ることを提示した。

(7) 本研究における、ASD と診断を受けながらも ASD とは見立てられない子どもの事例についての一連の研究からは、発達の遅れや順序が逆になるような「発達の非定型化」という特徴が、発達障害に類似の問題を示す子どもの特徴として明らかになった。加えて、ASD と診断される人の増加を時代背景からも読み解くと、この「発達の非定型化」と共に、現代の社会構造の弱まりや、現代人の心の構造の変化との関連も示唆された。本研究で得られた知見は、書籍での公刊に加え、同職種間のシンポジウム等での複数の講演の形で公表した。その際、ASD に近い状態の子どもに対する心理療法的アプローチのポイントについても提示した。「青年期の発達障害と精神療法」のテーマで行われた学会での招待講演では、「発達の非定型化」が思春期にも及んでいることを取り上げ、思春期のクライアントにとっても、セラピストというリアリティを伴う他者との出会いが重要であることを論じた。また、本研究成果を社会発信として広く公表するために、ASD の子どもへのプレイセラピーの有効性と子育て支援との関連をテーマにした一般公開のシンポジウムでも、ASD 増加の背景にある現代の社会傾向や、子育て支援の必要性について論じた。これらについては、講演記録としても公表した。更に、国際学会においても本研究の成果を発表するため、国際分析心理学会が「Research in Psychotherapy and Culture: Exploring Narratives of Identity」とのテーマで開催した大会で発表を行った。本研究に基づいて、ASD と診断された子どもへのプレイセラピーの成果を報告するとともに、日本で ASD と診断される人が増えていることの文化的・現代的意味を提示した。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 9 件)

畑中千紘、田中崇恵、加藤のぞみ、小木曾由佳、井芹聖文、神代末人、土井奈緒美、長谷川千紘、高嶋雄介、皆本麻実、河合俊雄、田中康裕、発達障害へのプレイセラピーにおける保護者面接の意義と可能性、箱庭療法学研究、査読有、29(2)巻、2016、17-28

皆本麻実、畑中千紘、梅村高太郎、田附紘平、松波美里、岡部由菜、粉川尚枝、鈴木優佳、河合俊雄、田中康裕、診断を受けながらも発達障害とは見立てられない事例の特徴、箱庭療法学研究、査読有、29(2)巻、2016、43-54

田附紘平、松波美里、鈴木優佳、発達の偏りとプレイセラピーにおける変容 発達障害と「診断」された 3 事例から、箱庭療法学研究、査読有、29(3)巻、2017、15-26

河合俊雄、発達障害と中世のころ、ミネルヴァ通信「究」、査読無、67 巻、2016、2-3

河合俊雄、発達の非定型化、ミネルヴァ通信「究」、査読無、69 巻、2016、2-3

河合俊雄、自閉症スペクトラム障害への心理療法の試みと時代性、臨床精神病理、査読無、38(2)巻、2017、166-174

梅村高太郎、長谷川千紘、畑中千紘、田中康裕、プレイセラピーが発達障害にもたらす効果の事例的・実証的検討 融合・分離の契機と破壊・対立を生み出す悪の意義、箱庭療法学研究、査読有、30(1)巻、2017、3-16

河合俊雄、木部則雄、滝川一廣、山中康裕、伊藤良子、千原雅代、シンポジウム「発達障害と遊戯療法」、遊戯療法学研究、査読無、16(1)巻、2017、69-96

河合俊雄、発達障害と現代における発達の非定型化、仁愛大学附属心理臨床センター紀要、査読無、13 巻、2018、1-18

### 〔学会発表〕(計 10 件)

梅村高太郎、悪に目覚める発達障害男児とのプレイセラピー、日本ユング心理学会第 5 回大

会、2016年

田附紘平、畑中千紘、梅村高太郎、皆本麻実、松波美里、岡部由茉、粉川尚枝、鈴木優佳、西珠美、大場有希子、松岡利規、望月陽子、河合俊雄、田中康裕、発達障害のプレイセラピーにおけるネガティブな事象 発達検査、日常生活の検討を含めて、日本箱庭療法学会第30回大会、2016年

河合俊雄、発達障害の見立てと遊戯療法における転機、日本遊戯療法学会第22回年次大会公開シンポジウム、2016年

河合俊雄、自閉症スペクトラム障害への心理療法の試みと時代性、日本精神病理学会第39回大会教育講演、2016年

河合俊雄、Various developmental disorder and sandplay、第19回韓国箱庭療法学会講演、2016年

鈴木優佳、畑中千紘、梅村高太郎、皆本麻実、田附紘平、松波美里、粉川尚枝、西珠美、大場有希子、松岡利規、望月陽子、豊原響子、文山知紗、河合俊雄、田中康裕、発達障害の子どものプレイセラピーにおけるセラピストの積極的働きかけについて、日本箱庭療法学会第31回大会、2017年

河合俊雄、発達障がいの子どものプレイセラピーと子育て支援、日本心理臨床学会第36回大会一般公開シンポジウム、2017年

河合俊雄、The Prevalence of Autistic Spectrum Disorder and its Cultural and Contemporary Meaning: Psychotherapeutic Research、Joint IAAP /Vilnius University/ LAAP Conference、2018年

粉川尚枝、畑中千紘、梅村高太郎、皆本麻実、田附紘平、鈴木優佳、西珠美、山崎基嗣、大場有希子、松岡利規、豊原響子、文山知紗、長谷雄太、水野鮎子、河合俊雄、田中康裕、発達障害の子どものプレイセラピーと発達検査の比較検討、日本箱庭療法学会第32回大会、2018年

河合俊雄、発達の非定型化と思春期心性の変容、第36回日本青年期精神療法学会、2018年

〔図書〕(計1件)

河合俊雄 他、創元社、発達の非定型化と心理療法、2016、208

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：梅村高太郎

ローマ字氏名：UMEMURA, koutarou

所属研究機関名：京都大学

部局名：教育学研究科

職名：講師

研究者番号(8桁)：10583346

研究分担者氏名：畑中千紘

ローマ字氏名：HATANAKA, chihiro  
所属研究機関名：京都大学  
部局名：こころの未来研究センター  
職名：特定講師  
研究者番号（8桁）：30532246

研究分担者氏名：田中康裕  
ローマ字氏名：TANAKA, yasuhiro  
所属研究機関名：京都大学  
部局名：教育学研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：40338596

研究分担者氏名：十一元三  
ローマ字氏名：TOICHI, motomi  
所属研究機関名：京都大学  
部局名：医学研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：50303764

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。